クリスマス習俗と木工品　－ドイツ・エルツ山地

2016 年 11 月 26 日　朝日カルチャーセンター立川　　岡部由紀子

＜エルツ山地は宝の山＞

ドレスデン
15 世紀、ザクセンの宮廷が置かれる。クリスマス市の伝統

フライベルク
12 世紀、銀鉱脈が発見され、中世、ザクセン最大の町として繁栄、重要な交易地。

アナベルク
15 世紀、銀の採掘が始まる。
フライベルクに次ぐ規模の町

シュネーベルク
15 世紀、銀の採掘が始まる。
16 世紀からコバルトの採掘

ザイフェン
13 世紀、錫が川でみつかる。
15 世紀、ガラス工房ができる。
18 世紀、錫の採掘の衰退から、鉱夫はろくろ木工細工へ転向。
20 世紀、クリスマス木工品生産の中心地となる。

銀、銅、鉛、錫などの鉱物資源はザクセンの貴重な財源
ザクセン鉱山業は、各地から集まった自営採鉱者（鉱夫）によって担われた。領主は武器の携行などの特権を与え、税を優遇し、新鉱脈の発見を促した。多くの町が「魔法のように」瞬く間に建設された。

＜誇り高き鉱夫たち・ Glückauf ＞

運に左右される仕事

良質の鉱石を掘り出せるかどうか　綱が頼りの坑道との往復は命がけ　18 世紀の鉱夫の平均寿命は 30 代半ば

→ 信心深さ(俗信も含めて)　坑道に入る前の祈りの時間　窓辺のカンテラ

→ 健康保険と年金を管理する相互扶助組織　Berg- und Hüttenknappschaft

強い連帯感　親しい家族が集まっての夜なべ仕事 Hutzenabend　男は木工細工、女はボビンレース作り

鉱夫たちのパレード　Bergparade

1719 年、ザクセン選帝侯 フリードリヒ・アウグスト 1 世（強健王）の息子の結婚祝賀のパレードが空前絶後の規模

エルツ山地の各鉱山局が、王の命令に従い鉱山業関係者 1500 名を選び、ドレスデンでのパレードへ送り出した。

王の監修のもと、鉱山業関係者の晴れ着の服装規定が作られた。 → 職種や階級がわかるようなユニフォーム

現在アドヴェントの時期に催されるパレードの参加者は、このときの服装規定を参考にしている。

→ クリスマス飾りの人形の服装

＜クリスマスの季節の伝統行事＞

アドヴェント Advent :クリスマスの４週間前の日曜日からイブの日没までの期間（ 2016 年は 11 月 27 日から）
十二夜　Internächte : 12 月 25 日から 1 月 6 日までの期間、死者が還りさまざまな霊が現れるという民間信仰

アドヴェント前週	「人形たちを起こす」 各家庭で、クリスマスの品物を出し、手入れをして飾り付ける。アーチ型の燭台、鉱夫と天使の人形のロウソク立て、くるみ割り人形、煙出し人形、ピラミッド、吊り燭台など。	Männelwecken Schwibbogen, Bergmann & Lichterengel, Nussknacker Räuchermann, Pyramide Weihnachtsleuchter
アドヴェント前日	祝いの食事、ローソクに初めて火を灯す。 教会の塔上では、トランペットや太鼓、聖歌隊の合唱。	Festessen (Neunerlei) Turmmusik
アドヴェントの期間	クリスマス市の開催 「鉱夫たちのパレード」が各地で催される。 家庭では、クリスマス菓子のシュトレン作り。 子供たちが家々を訪れて歌を唄い、心づけをもらう。 クリスマス前の最後の勤務後、「鉱夫たちの集会・メッテンシヒト」が開かれる。	Weihnachtsmarkt Bergparade Stollen Kurrende Mettenschicht
12 月 24 日 クリスマスイブ	18 時の鐘の音と共にロウソクを灯し、祝いの食事 コーヒーとシュトレン クリスマス礼拝（昔は 25 日午前 4 時から ）ランタン持参	Heilig-Abend-Licht Neunerlei, Kaffee, Stollen Christmette, Mettenlicht
12 月 25 日 クリスマス	祝いの食事、コーヒーとシュトレン 親類を訪問	Festessen

光は幸運と命の象徴

窓辺に灯を灯す　　アーチ型をしたロウソク立て　　鉱夫と天使の人形のロウソク立て
食卓には錫製の燭台
天井から吊されるシャンデリア型の「クリスマス燭台」
円錐形の塔の燭台「ピラミッド」
クリスマス礼拝に持っていく装飾ランタン

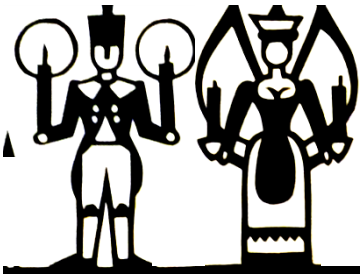
縁起かつぎ

クリスマスの飾り付けをする日、片づける日
シュトレンを食べる期間
祝いの食事は９品
食卓の上に灯すロウソクの脇に、パン、塩、お金を置く。
悪霊を遠ざけるお香を焚く
呪いの言葉は禁句
吉凶を占う

→ エルツ山地のクリスマス習俗には、鉱夫たちの切実な願いと祈りがこめられていた。

＜クリスマスにちなんだ木工品＞

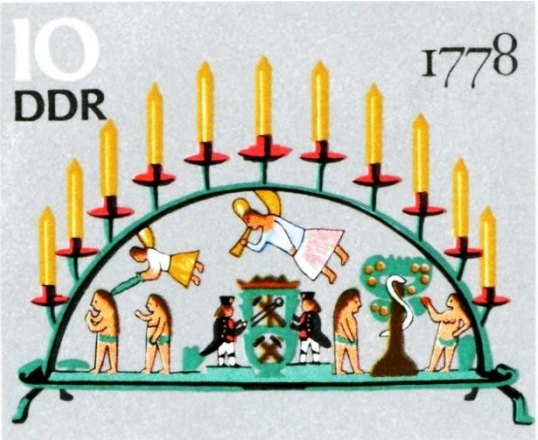
鉱夫と天使の人形のロウソク立て　Lichterbergmann & Lichterengel



17 世紀、教会の祭壇に錫製の鉱夫姿の燭台
18 世紀末、豊かな鉱山都市の教会に、ロウソクを手にした鉱夫の大型の彫像
19 世紀、ステアリンのロウソクが普及
→　ろくろ木工細工の小型ロウソク立てがクリスマス飾りとして登場。
最初は、腕や足先は、ライ麦粉、おがくず、膠で作った粘土製だった。
天使のロウソク立てもその頃から登場して、セットで飾られることが多い。

アーチ型の燭台 ・ シュビップボーゲン　Schwibbogen

メッテンシヒトの時、鉱夫達がカンテラを坑道への入り口のように半円形に壁にかけたことから、アーチ型の照明が生まれたともいわれる。金属製のシュビップボーゲンは限られた地域のものだったが、20 世紀にエルツ山地全体に広まり、木製の燭台も登場した。今では、窓辺を飾るアーチ型の照明はエルツ山地の冬の風物詩となっている。



1778 年、ヨハンゲオルゲンシュタットの「メッテンシヒト」に招待された鉱山鍛冶が、鉱夫たちに贈った鉄製の燭台が図案となった切手

1937 年、シュバルツェンベルク市の展示会に出品されたデザインが大人気となった。ボビンレースを編む女性、晴れ着の鉱夫、おもちゃ職人、吊り燭台、天使、煙出し人形、選帝侯の刀の紋章、鉱山業のシンボルマーク

ピラミッド　Pyramide

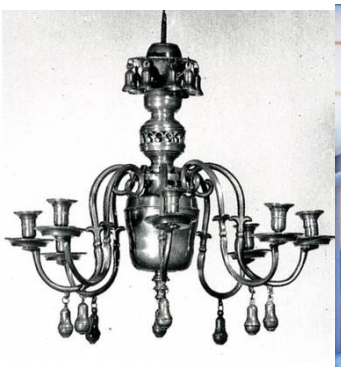
ロウソクの炎が作る上昇気流が上の羽を回し、円錐形の塔がゆっくり回転する仕組み
鉱石を搬出したり、地下水を排水する装置を作る高度の大工仕事の技術から生まれた。
1800 年頃から、エルツ山地の居間にツリーの代役として飾られた。
腕自慢のおもちゃ職人が、家族のために作ったもの
塔の内部には、木彫り、ろくろ細工、粘土細工のミニチュア人形
　キリストの生誕にまつわる逸話
　鉱山での仕事やパレード、狩りの場面と動物たちなど

→　卓上に置く「小型のピラミッド」、クリスマス市で回転している電動式の「巨大ピラミッド」

吊り燭台　Weihnachtsleuchter

1800 年頃には、天井から吊した燭台や、食卓や床に立てられた「ピラミッド」が、クリスマスの居間を照らしていた。
地下の坑道に吊された木の枝で作られた簡素なロウソク立て、ザイフェンにあったガラス工房 (1488-1830)製のシャンデリア、フランドル地方から伝わった錫製の蜘蛛形燭台などに、ルーツがあると考えられている。

おもちゃ職人が、家族のためにろくろ細工で作った木製燭台
カラフルに色づけされ、ミニチュア人形を飾り付けたりもした。



1800 年頃、ザイフェンで作られた錫製の蜘蛛形燭台

ザイフェンの教会にある
1670 年頃のシャンデリア

煙出し人形　Räuchermann　クルミ割り人形　Nussknaker

お腹の空洞で香を焚くと、口から煙りを吐く仕掛けの煙出し人形
てこの原理を利用して、大きな口でクルミの殻を割る人形
19 世紀後半から 20 世紀にかけてエルツ山地のおもちゃ職人が工夫を重ねて現在の形となる。
香は、エルツ山地西部のクロッテンドルフ Crottendorf で、1750 年ごろには作られていた。
木炭、ヨーロッパブナの粉末をジャガイモ澱粉で固め、乳香(黒)、トウヒの葉(緑)などを加える。

聖歌隊の子供　Kurrende　装飾ランタン　Mettenlaterne

礼拝、結婚式や葬儀で聖歌を歌う少年たちが、アドヴェントとクリスマスの期間、家々を訪ねてこの季節の歌を披露して、心付けをもらう。
掲げているのは、クリスマスのモティーフが彫られているランタン。
クリスマス礼拝に行く人々も、装飾ランタンを携帯する。

エルツ山地の木工芸

銀鉱山で富を築いた地域（エルツ山地西部が中心 ）
　余暇を利用して作られた大型の写実的な木の彫刻 … 晴れ着姿の鉱夫や鉱山関係者がモデル

鉱山業だけでは暮らせなかった地域（ザイフェンなどエルツ山地東部が多い）
　豊かな鉱山都市の木彫を小型化、単純化して、ろくろ細工や粘土型を利用して同じ形を大量に作る工夫が行われた。
　→ 鉱夫の暮らしと思いを反映した独特のデザインのクリスマス飾りが生まれ、世界市場へと拡がっていった。